

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32627

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884052

研究課題名(和文) 台本を基礎資料とする明治期歌舞伎の作品研究

研究課題名(英文) A Text-Based Study of the Kabuki Works in Meiji Period

研究代表者

日置 貴之 (Hioki, Takayuki)

白百合女子大学・文学部・講師

研究者番号：70733327

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：全国各地に残存する上演台本を基礎資料として明治期に初演された歌舞伎の作品分析を試みた。この時期の歌舞伎の作品研究は、全集が備わる河竹黙阿弥の作品をはじめ、東京での初演作品を中心に行われてきたが、大阪・京都初演作品や小芝居の上演作品の検討を通じて、東京初演作品との間の相互関係等を指摘し、より広い視点に立った明治歌舞伎史の足掛かりを築くことができたと考える。

研究成果の概要(英文)：Based on the research into the scripts, this research project analysed the kabuki plays in the Meiji Period. Previous studies on this subject have mainly discussed on the works which were first performed in Tokyo, especially on the works of Kawatake Mokuami. However this research focused on not only the plays which were made in Tokyo but also the plays of Osaka and Kyoto. And this research clarified the relationship between the Tokyo-kabuki and kamigata(Osaka and Kyoto)-kabuki in the Meiji Period.

研究分野：日本文学

キーワード：歌舞伎 明治 演劇 台本

1. 研究開始当初の背景

歌舞伎の作品研究を行う上で、もっとも重要な資料となるのが上演台本である。慶應年間まで(近世期)に初演された歌舞伎の台本の所在は、『国書総目録』(岩波書店、補訂版2001~3年)および、同目録をもとに行ったさらに詳細な書誌調査の結果である、歌舞伎台帳研究会編『歌舞伎台帳所在目録及び書誌調査』(科学研究費研究成果報告書、1981年)によってかなりの部分を把握することができる。また、上記調査の成果を反映した歌舞伎台帳研究会編『歌舞伎台帳集成』全45巻(勉誠出版、1983~2003年)は近世期の重要な歌舞伎台本の多くを活字化したものであり、現在の歌舞伎研究の水準を示すものといえる。

これに対して、明治元年以降に初演された歌舞伎作品の上演台本は全国に多数残存しているものの、その調査は近世期に比べ遅れている。台本目録が公刊されているのは、阪急文化財団池田文庫(『阪急学園池田文庫所蔵歌舞伎台本目録』、1970年)等一部の所蔵機関もしくは、河竹黙阿弥(「館蔵黙阿弥関係資料目録」、早稲田大学演劇博物館編『没後百年 河竹黙阿弥 人と作品』、1993年所収)のような重要な作者の作品に限られている。そして、翻刻の状況を見ても、戦前の『黙阿弥全集』(春陽堂、1924~6年)が目立つ程度で、近年の歌舞伎研究の水準を反映するような翻刻書や、一般読者の触れやすい注釈書は近世期の作品に比べて著しく少ない(注釈としては原道生他校注『新日本古典文学大系明治編 河竹黙阿弥集』〔岩波書店、2001年〕がほとんど唯一の成果と言ってもよい)。

しかし、もちろん近世以来の歌舞伎の流れが、明治元年をもって突然途絶えたわけではなく、明治期の上演台本の調査・研究は、近世から近代の演劇史を考える上で必須かつ急務である。

2. 研究の目的

本研究では、上記「1. 研究開始当初の背景」に記した状況を踏まえ、明治期歌舞伎台本の網羅的書誌調査と所在目録の作成および、網羅的に上演作品を把握することによる、広い視野に基づく作品研究を行い、以下のような点を考察することを目指した。

(1) 前後の時代との間の影響関係の考察。明治期の歌舞伎が、近世期の歌舞伎からどのような側面を受け継いだのか、また逆にどういった点で断絶が見られるのかを、主に表現内容や作品に用いられる題材という観点から考察する。明治期の歌舞伎が近世期に比べてより簡潔な表現を求めたことはしばしば指摘されている(早い例では伊原敏郎『明治演劇史』、早稲田大学出版部、1933年)。その指摘自体はおおむね正しいと思われるが、明治期の「簡潔な表現」とは決して画一的なものではなく、地域や劇場・作者・俳優等、

いくつもの要素ごとに重層的に現れていたものと思われる。その諸相を明確に把握することが現在の明治歌舞伎研究の課題である。本研究では横断的な台本調査を通じて、一部の地域や劇場・作者に偏らない作品研究を実現し、この問題に答えることを目指す。また、明治期の歌舞伎は、新派劇等の新しい形式の演劇に対して影響を与えたとともに、それら後続の演劇からなにがしかの影響を蒙ったことも確かであると考えられる。明治後期までを射程に入れた歌舞伎台本の調査をもとに、新派との比較や、新派の登場による歌舞伎の表現上の変化に関して考察を加える。

(2) 明治歌舞伎特有の題材上、表現上の性質の指摘。近世期に見られなかった明治期歌舞伎の新しい題材・表現として、外国戯曲・小説の翻案や、新しい傾向の歴史劇である「活歴」等についてはしばしば言及されるが、そこで論じられる作品の多くは明治前期にもっとも進歩的であった東京・新富座の上演作品であるなど、従来の考察には偏りが見られる。本研究では網羅的台本調査の成果を生かし、他の地域・劇場等における明治期歌舞伎の題材・表現上の新機軸についても指摘を行うとともに、新富座等との影響関係にも考察を及ぼす。

(3) また、副次的な目的として、明治期の歌舞伎作品の全体像を把握することで、従来翻刻がなされず、注目されてこなかったものの、演劇史上重要な意義を持つと考えられる作品や、今日の視点から再評価の可能性がある作品を見出すことも目指した。これらの作品が将来的に翻刻紹介されることで、上演作品が限定されている現在の歌舞伎に対して、示唆を与えることが可能である。

3. 研究の方法

(1) 全国の所蔵機関に残存する歌舞伎台本の書誌調査。各機関の目録や従来の調査における成果を参考にしつつ、各機関で新たに調査を行い(調査項目は「1. 研究開始当初の背景」に挙げた『歌舞伎台帳所在目録及び書誌調査』の調査項目に準じる)、明治期歌舞伎台本の所在を把握する。さらに、複数の伝本が残る作品に関しては、諸本間の異同を検討することで、それぞれの伝本の性質等を明らかにする。

(2) (1)の成果を踏まえた、作品内容の分析。網羅的書誌調査の成果を活用し、従来の演劇史においては見落とされがちであった作品にも光を当てた作品研究を行うとともに、翻刻が備わる作品や現在も上演される作品については、翻刻の本文や現行上演台本との比較を行うことで、既存の翻刻(特に『黙阿弥全集』等、戦前に刊行された翻刻書)の妥当性や性格を検討し、現行上演台本や演出についても問題提起を行う。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」(1)に記した書誌調査に関しては、全国の所蔵機関で書誌調査を行ったものの、目標としていた明治期歌舞伎台本の所在目録作成には至らなかった。これは、一部機関における調査が、対象期間の長期休館等に併い計画よりも遅れたことや、当初書誌調査の対象に含めていなかった、明治期刊行の活版印刷による歌舞伎台本の本文の検討を通じて、これら活版本も写本と同様に網羅的調査を行う必要があるという結論に至ったためである。今後の明治期歌舞伎研究の進展のためには、網羅的な台本目録が必要であることには疑いの余地がないので、本研究計画の終了後も調査を継続し、将来的には目録を公表することを目指す。

「3. 研究の方法」(2)の作品内容の分析という点では、まず従来あまり注目されてこなかった、明治期大阪の上演作品および、黙阿弥の門弟の諸作品に関して、新たな知見を得た。

たとえば、明治期の新風俗を描いた歌舞伎狂言のジャンルである「散切物」について、従来の研究は主に黙阿弥の作品を対象として分析してきた。これに対して本研究では、大阪初演の散切物の内容を検討することで、散切物の多様性を明らかにするとともに、黙阿弥の作劇上の特色に関して、新たな指摘を行うことができた。

また、東西劇壇の交流や相互の影響関係を、作品内容や演出の観点から具体的に指摘することができた点も、本研究の成果である。特に、東京の劇場・春木座における上演作品や、その上演に対する観客の反応等の検討によって、明治初年に大阪劇壇が新富座を中心とする東京劇壇から多大な影響を受けたが、これが一方的な影響にはとどまらず、後年、逆に大阪劇壇が東京劇壇に一定の影響を与える、「還流」現象があったことを、具体的に示した(口頭発表「鳥熊芝居以後の春木座について」、歌舞伎学会、2014年12月14日)。

黙阿弥の門弟の作品や活動についても、上演台本の調査・検討から、いくつかの指摘を行った。特に河竹能進およびその子息・三代目勝彦蔵の作品の活版印刷による出版の性質に関して指摘を行うことができた点は従来の研究にない成果である(「黙阿弥と新歌舞伎のあいだ ―「狭間」の作者たち―、神山彰編『交差する歌舞伎と新劇 近代日本演劇の記憶と文化 4』森話社、2016年)。

一方、すでに一定量の研究の蓄積がある黙阿弥作品の研究においても、上述の散切物の比較を通じた新知見をはじめ、いくつかの成果を挙げることができた。たとえば、黙阿弥の散切物の代表作であり、現在でもしばしば上演される「水天宮利生深川」の台本の検討および、上演当時の社会状況との比較によって、本作のなかで新聞が担う機能を明らかにした。なお、その成果は論文「河竹黙阿弥作「水天宮利生深川」における新聞の機能」

(『演劇学論集』第62号)として公表したが、同論文では作品の分析に加え、同作品の翻刻と早稲田大学演劇博物館所蔵の初演系と考えられる上演台本との異同に関して一部触れることができた。また、初演台本と現行上演台本との比較をもとに、現行演出に対する問題提起を行い得たことも、成果と言える。

現存する明治期の上演台本と、翻刻や現行上演台本との異同に関しては、他の複数の作品についても検討を行っており、本研究計画の終了後も継続して調査・検討を行う予定である。これらの成果は、現行上演台本や演出の再検討や、復活狂言等にも間接的に寄与するものと考え(復活狂言に関しては、すでに日本演劇学会 2015 年度秋の研究集会のシンポジウムにおける報告「研究者に何ができるの? 歌舞伎の復活狂言をめぐって」において、研究成果を踏まえつつ発言を行っている)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

日置 貴之、河竹黙阿弥作「水天宮利生深川」における新聞の機能、演劇学論集、査読有、62巻、2016、掲載確定

〔学会発表〕(計 4 件)

日置 貴之、研究者に何ができるの? 歌舞伎の復活狂言をめぐって、日本演劇学会 2015 年度秋の研究集会、2015 年 10 月 24 日、法政大学(東京都千代田区) 招待講演

日置 貴之、The Dramas of Shintomi-za and the Society of Early Meiji Era, Annual Conference of the International Federation for Theatre Research、2015 年 7 月 19 日、The University of Hyderabad (Hyderabad, India)

日置 貴之、「水天宮利生深川」における新聞の機能、日本演劇学会 2015 年度全国大会、2015 年 6 月 21 日、桜美林大学(東京都町田市)

日置 貴之、鳥熊芝居以後の春木座について、歌舞伎学会、2014 年 12 月 14 日、東京女子大学(東京都、杉並区)

〔図書〕(計 2 件)

日置 貴之、笠間書院、変貌する時代のなかの歌舞伎 幕末・明治期歌舞伎史、2016、346

神山 彰、日置 貴之 他、森話社、交差する歌舞伎と新劇(近代日本演劇の記憶と文化 4)、2016、352

6 . 研究組織

(1)研究代表者

日置 貴之 (HIOKI, Takayuki)
白百合女子大学・文学部・講師
研究者番号 : 70733327